

Wri News Letter 57

TMO

1978年4月4日 戦争抵抗者インターナショナル日本 大阪市あべの区旭町2-12-2 泉原文化

花咲尊作戦記

戸田るり子

ドーロやるならニカイゴとなされ、ヨイヨイ、テッカカンシヨ

午後十時前、いよいよ出発。私のケルーフは駅前周辺地区の担当である。

花咲いたような壮観さ。花咲尊作戦とは、うまく名付けたもの。

適当な間隔をあいて、三人が歩く。歩きながら裏袂をはがすと、これと目をつけた箇所にはパツと立止まらないうで賄る。と、うしろからくる一人が、近づいてきて、その横へペタリ。小さいステッカーを集中して賄ることによって目立たせるやり方である。はじめは歩く速さと賄るタイミングがうまくいかず、三人が一ヶ所に立止まったりしたが、指先が寒くなるころには、すっかり慣れてきた。見はり役も兼ねるYさんも夢中になって賄っている。「捕ったら、その時やしなど気楽なものだ。8種類のステッカーを並べると赤白黒の印刷がとてよく目立つ。効果ばつぐんだ。

午前二時すぎ、ようやくお坦の〇十枚賄付完了。帰る途中、前方のうす暗やみの一面につづく並木に、ひらひらと風にひるがえるものかみえ「あっ、あれとちがうか、すごい、すごい。こうしてみると、きれいやねえ」。別行動球がステッカーを荷札風にして、数百となく木の枝にくくりつけたのである。「よう自立つゆ、これはいいアイディアやであした、出勤してきた人達びっくりするやろ」帰ってそれそれの報告があつて、寝たのは午前四時頃。Fさん、Tさんはすぐはがされた敵の本拠へ、よしもう一度と出かけて、守衛さんに追いかけられるという一幕があつたらしい。

大阪とくらべると町がとてみきれいで、路上もそうじがいきとどいてる。一度すてた裏袂を拾ってポケットにしまつ。はじめの緊張がとけると、大胆になった。バス停などウァーというくらい一ぺんに花

翌朝、十時半起床。Hさんたちが心をこめてつくってくれたあにぎりをどっさり車に積みこんで出発。一路現地へ。にせあかしやの原生林と、渡り鳥が休息する海辺をながめながら、運転のHさんから、現地斗争のことな

バス停などウァーというくらい一ぺんに花

ながら、運転のHさんから、現地斗争のことな

※本誌毎号送付希望の方は、宛名記入・五〇円切手賄付の封筒五つ十枚を一括、ウリ事務所宛お送り下さい。納代は無料。

振替口座 〇〇ウリへの送金は、大阪三三三モウリヤパン向井孝

どを聞く。駅で休けい。早速ステッカーをペタペタ再び出發。近づくにつれて、立着が目につく。賛成派の金だけをかけた、いかにもペンキ屋さんがかいたという立着にくらべ、反対派のものは、絵がかいてあったり、文句が一つ一つちがっていたり、素材だけで、反対の思いがにじみ出ている。

車一台がようやくすれ違えるほどの山道をこえろと村が見えてきた。小屋から首を出した牛に思わすびっくりしたりして、現地のA団結小屋へ着いたのが三時半前。訪ねると、あいにく留守だった。そこから歩いて村はずれにある建設予定地に建てられた見はり小屋まで二十分。車を置いて、ひっそりとした村の中を見はり小屋まで、ステッカーを要所要所に貼りながら歩いていく。さびしい村の通りは、たちまち赤白黒のあざやかなステッカーの列。出会うのは、老人と子供、そして女たちばかりだ。すれちがう村人に声をかけるとあいさつが返ってくる。Mさんが校ぶりのよい木を見つけると、荷丸ステッカーをぶらさげる。木がみるみるうちにセタまつりみたいになされていく。

寂びしだいにとびえ、田んぼと荒れた草地が海辺へとつづく。床上式の見はり小屋が見えて来た。遠くで見るとなんだかあぶなっかしいが、近寄るとしっかり丸太が組んであった。空中につくられた四角い小屋は、ストーブまであって意外にあたたかく

ひろい。のぞき窓があり、ハンゴも上へ吊り上げられるように、工夫されているのをみて、きびしさを感ずる。小屋のすぐ下が海で、そこから湾の向う側のB団結小屋まで、ずっとコンクリートの提防がぐるぐるつゞく。この見はり小屋のすぐ先の提防の曲り角から対岸の岬までの扇形の遊が埋め込められるという。

小屋の近くの小舟の中で、老夫婦がとってきたモスクを缶につめている姿が印象的だった。

きれいな水、美しい湾。沖繩で見た海とちがって、淡泊というか透き透きとした美しさだ。

B団結小屋はプレハブ作り、おいひひろい。ランプが天井からぶらさがり、ストーブがあかあかともえて留守を守る漁師らしいおじさんがひとり。ふとんが隅につんである。十人分いやもつと。週一回、あつかあたちが来て、せんたくして取りかえていくらしい。「あんたら、そんなにして全国をステッカー貼って歩いてるんかいなあ」と言われる。「うん、それもいいなあ」と思う。水を飲みたいと思ったが遠慮した。遠くから運んでくるのだという。体が少しあたたまったところで、ひきあげる。

夕やみせまる村の路上は、にわかになぎやかになつた。町へ働きに行っていた人達がバスを帰って来たのだ。木や電柱や、カベにぶらさげであるいっぴいのステッカーを見て「今日は一体なんやの」「火電阻止のステッカー貼りに来たんです。かえり道もまっ」と貼っ

て行くんです。」「ごくろうさんじやのつ」など言葉をかむす。

帰路、ところどころで車を止める。ステッカーを貼っては又・出発。

町並にはいつて〇駅の手前キメートルぐらいで下車し、それから歩いて、ニケループに別れて行動。賛成系の大きな看板に「先生もストはやめて下さい。……に賛成しよう」とあるのにはあどろいた。

午後九時半帰着。夕食後、雑談。

「④ステッカーの時には、貼ってるうしろからブスツと殺られそうは恐ろしさがあつた。貼ってエレベーターで上って、下におりてくると、もうはがされていた。今度は、その点気象なもんで、久しぶりに愉快だったな」とEさん。

翌朝、貼ったところを見に行く。ケリーの作業服の男二人が、ヘラのようなものを使って、一枚一枚削りとっているのに出くわす。さすが中心街、目抜きのところ、とくに電力会社の周辺は完全に、すではがされていた。

しかし、少し入った横丁や離れた地域、それから中心街でも物陰みないな場所は見暮しがあつて、ちやんと残っていた。

〇〇〇枚ものステッカーをはがすには、ちっと時間がかかるだろう。太成功。

午後一時すぎの列車で帰阪。富村さんの全国行脚

じやないけど、ステ貼り行脚も面白そう。次なる場所は、はて、どこへ……。

ステ貼り作戦注意事項

①貼りたい気持はやまやまだが、敵に正面攻撃をかけると、すぐにはがされて、効果はうすい。(目的は、できるだけ多くの人の目にみれること)のき道で、人が立ち止るような場所をさがして貼ること。

②見はりについて、貼り役は前方を注意。見はりは、後方と向い側をともに注意(何かのとき、見はりが見やママさんとよぶ中合せをした。これは、パトカーなどをやりすごすのに役立つ)

③荷重用ステッカーを木につるすのは、手軽な踏み台があつた方がよい(敵にできるだけでまどらせる為)にちつとも高いところへ吊す)

④單手がタオルをもって歩くことへ貼付場所にホコリがついている時、とつてから貼るとピツタリくっつく

原野連学習会 13.20 解放センター 使用資材燃料とは!

京大熊野原子爆実験所「ヨウソウ」をよばれる使用資材燃料の研究をしていゝ小出裕富さんの話は落ち着いたよく透る音で始つた。その日、国産骨炭「ぶげん」が簡単に達したと新聞は報じている……

一九五三年三月十日と云えば「ギョ」で核実験があり、高貴丸の被爆家で日本中か

蔵庫につまらぬ日である。その旨もあつたに原子力計算が国会に提出され、我が国の原子力開発がはじまつた。原子力を存在電力として考へると、今とておなじものだ。重燃料金は二十分の二になる。原発には火力発電の場合のように大工場を必要としない。大煙突も貯蔵場もいらない。原子力の発電機が利用できれば、ボイラーの水すらいらない。もちろん山向へき地を選ぶこともない。ビルディングの地下室が貯蔵庫としてつくことになる。毎日新聞が四月二日、当時のこのような楽観ではじまに原発がいま現実になつた。現在では、まるで怪物語りだ。たことは、もう誰も知らない。

① 使用者燃料とはどのようなものか。

原発でウランが燃えるとき発生する。死の灰と呼ばれる多種多様な放射性物質が発生する。これを使用者燃料といふ。百万kWの原発が一年間動くと、一トンのウランが燃えて、同時に死の灰が一トトン生じる。この死の灰の量は、広島原爆の二〇〇倍分に相当する。たとへば一トンの使用者燃料(死の灰)中の放射性物質の二、ストロンチウム90といつだけとりあげても、四億人(全人類の数を越える)分の最大許容量に相当する量が生じる。死の灰の恐ろしさは想像に絶する。

② 使用者燃料の再処理について。

使用者燃料(死の灰)の再処理では大量のプルトニウムが生じる。カッター大統領はそれが核事故となるという理由で、米国内の再処理工場の稼働を禁止した。イギリスでは周辺の汚染がひどいため停止するほど。世界の再処理工場は二つも満足に動いていない。現在、世田谷中に処理できない使用者燃料(死の灰)が放置されたまま増えつつついている。ステンレスで内張りされた長さ三メートルほどのアルミの筒の中に入れておき、水に浸しておける。しかも燃料棒も近づきすぎないように置かないと危険であり、燃料棒はゼリウムとコウリウムという金属につまれているが、永く水につけておくと錆びが生じたりして、死の灰が水中にも出る可能性がある。

③ 放射性物質輸送事故について。

輸送中の事故は年間60〜80回アメリカでは起つてゐるし、メキシコでは巨艦大のヨバルト60をトラック輸送中に暴もといを拾つた子供の家族四人が死亡するといふ事故が起つた。

使用者燃料(死の灰)の搬送用容器(モヤスク)は、約七〇トンの重量で、これだけでもギヤスクの安全性はきつめて餘り。各国政府は輸送中の事故対策を具体的に講じているが、日本では全く無防備であつて、事故が起きたときどうするか、緊急処置をどうするか、対策すらつておいていない。一たび事故が生じるとギヤスクの放射線しゃべりの鉛は三ニで度で溶解して、たちまち放射線がもたらす問題を考えなくてはならない。

それから最近のことくに印象にのこつたことをひとつ。プルトニウムを入手できないのは原爆は簡単に作れる。そのプルトニウムは、原発の死の灰からほとんどできる。核シヤックがたり大変な一頃、新聞雑誌が「かきたたけありはウソ。死の灰の危険性、取扱ひのむづかしさを考えると、とうてい一般市民まで政府に届けられる人たつたには不可能だ。簡単に入手して原爆を作るなんてことはできない。その意味で原爆を作りうる唯一の障碍は国家しかない。国家がそれを独占しなから、なお原爆が簡単にできる」という宣伝は、核シヤックを理由にしてよりまがしは管理社会体制を私たちに押しつけようとするおどかしと口実でしかない。ーといふこと。(八百)

4月10日(月) PM7:00 観5000円

原爆映画 虹の民 阿木幸男氏の報告

京都 櫻天(ほんやら洞) Tel. 221-4859 せひ見に来て下さい。